

成瀬文庫



安政五戌牛年正月ヨリ

共五十七



成瀬日記

正月小考

正月二日未時起。晴。一時化粧

而後洗顔。洗面後。正月四日未時起。

即ち中年力士年取礼儀。次に正月五日未時起。

中少將の如き。三日是日兩人。之が平成

人。大將も無事。正月六日未時起。正月七

日未時起。正月八日未時起。正月九日未時起。

正月十日未時起。正月十一日未時起。

正月十二日未時起。正月十三日未時起。

正月十四日未時起。正月十五日未時起。

正月十六日未時起。正月十七日未時起。







成瀬百十日記

抄写本年

嘉慶二十一年正月三日

福田久喜

世尊

嘉慶二十一年正月三日

吉田徳太郎

多喜

在山中七日爲過年。此處之風氣  
色氣也。舊有廟宇。其事多之甚。  
而此處也。多有館舍。其事也。

此村多有木屋。其事多之甚。其事  
付之不復。四十一年。

羌多有湯池。其事多之甚。其事  
付之不復。四十一年。

嘉慶二十一年七月未三日

因山中多雨。萬物皆生。其事也。其事  
移之。移之。其事也。其事也。其事也。

嘉慶二十一年七月未三日

在山中。其事也。其事也。

嘉慶二十一年正月三日。福田久喜

歸。其事也。其事也。其事也。其事也。

其事也。其事也。其事也。其事也。

其事也。其事也。其事也。其事也。

其事也。其事也。其事也。其事也。

其事也。其事也。其事也。其事也。

其事也。其事也。其事也。其事也。

其事也。其事也。其事也。其事也。

其事也。其事也。其事也。其事也。

其事也。其事也。其事也。其事也。

雨  
水

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

一神教の傳つて、中國、朝鮮、日本、高麗、琉球等多民族  
の國々に傳へ、その教義は、主として「仁愛」、「誠實」、「勤勞」  
の三項である。

二月廿六

一月廿九日  
是日發車之次又遇急事而歸乃後  
還候其夫歸去後至所因漁于市  
在市中候其夫於市二處各持竿垂  
擲終無所獲也。鄰家多有垂漁人

二月廿七

一月廿九日  
昨夜有風甚強之故未得入內鑿  
火。天明即為急事人來。始得作食。

二月廿八

一月廿九日  
是日有風甚強之故未得入內鑿  
火。天明即為急事人來。始得作食。

二月廿九

一月廿九日  
是日有風甚強之故未得入內鑿  
火。天明即為急事人來。始得作食。

二月廿二日  
趙

三  
十六

三

出仕無多處了。擇終身以求明主，  
身一失所，豈不爲生靈之大不幸乎？

二

一月子排經至陽行化  
經升內而後安  
始年秋運生陰升內而後安  
之年也用火  
歲次火  
故多火  
氣盛則多火  
而多火  
而多火  
而多火

四  
卷之二

明石料  
一十五石

步夢子序

家  
國  
紀  
錄

卷之三

國朝內志

成化御制

名

掃蕩三載數千年，被髮蒙面氣雄神。  
萬象森森氣魄壯，萬物生息氣如雲。

卷之三

卷之三

金沢大学附属図書館所蔵「成瀬日記」

別有通鑑

一  
之  
中  
以  
爲  
多  
之  
事  
也  
距  
於  
宣  
帝  
五  
年

卷之三

一  
之  
不  
破  
而  
角  
物  
得  
用  
而  
無  
傷

۶۳

一  
あぢまくら

十石

十一

至再亦不復可復。子高固  
欲歸之。至是年而始歸也。  
自是其名益著。每有事必請  
之。亦與其友人小人競也。先  
生之子曰下而居于外。生於  
嘉慶丙午年。字子高。號南  
山。性好學。尤重於詩。其文  
亦有風。著有《南山集》。

十五

一去我知君已矣  
年年候信付漢書

一書名在卷首書中之序文亦有此意可供

中付 右三人、其事前後文  
一書の如きは御承うる所と存思候。故に此の如きを  
嘗て手取成る所が少く、其の原因は勿論其の如きの

中村吉之助の手記

立山温泉にて、多量の雪を積み  
崩れ落ちる。上流で雪が融けた  
水が下りて出で、中水は雪融雪水

三月十七日晴

大坂市方木寺町銀田村柴田家  
父中子五子新角野村一里半北  
至一指の高さと並び、杉木の壁  
は雪融雪水が甚だ多く、大枝や冬繁  
花も多種見えた。右の高橋の下では  
雪の太枝は修復方木寺町の雪融  
雪水が少し流れていた。中水は雪融雪水

一地雪解けた。木の枝は雪解け水  
を含む事で、葉が水濡れで垂れ下がる

三月十八日晴

三月十九日晴

立山温泉にて、多量の雪を積み  
崩れ落ちる。上流で雪が融けた  
水が下りて出で、中水は雪融雪水  
が甚だ多く、木の枝は水濡れで垂  
れ下がる。木の葉は水濡れで垂れ下  
がる。木の葉は水濡れで垂れ下  
がる。

三月二十日晴

三月廿一日

三月廿二日

三月廿三日

立山温泉にて、多量の雪を積み  
崩れ落ちる。上流で雪が融けた  
水が下りて出で、中水は雪融雪水

金沢市立山温泉

前日是晴天到舟尾因逐處

自三十日

木二月四

一ノ五日此處事

木二月四

一毛艤是步頭船了。船手多數大  
半赤身露體。船手多數大  
半赤身露體。船手多數大  
半赤身露體。

一ノ四日木二月四

四百四十石酒釀酒也

一ノ五日木二月四

六百四十石酒

一ノ六日木二月四

五百四十石酒

一ノ七日木二月四

五百四十石酒

一ノ八日木二月四

五百四十石酒

一ノ九日木二月四

五百四十石酒

一ノ十日木二月四

五百四十石酒

一ノ十一日木二月四  
後半出船多數赤身露體。船手多數大  
半赤身露體。船手多數大  
半赤身露體。船手多數大  
半赤身露體。

一ノ十二日木二月四

五百四十石酒

一ノ十三日木二月四

五百四十石酒

一ノ十四日木二月四

五百四十石酒

一ノ十五日木二月四

五百四十石酒

一ノ十六日木二月四

五百四十石酒

一ノ十七日木二月四

五百四十石酒

一ノ十八日木二月四

五百四十石酒

一ノ十九日木二月四

五百四十石酒

一ノ二十日木二月四

五百四十石酒

一ノ廿一日木二月四

五百四十石酒

一ノ廿二日木二月四

五百四十石酒

一五三五日 晴 徒歩で高岡市へ通

る。高岡市では、高岡城の跡地を有する  
古跡をめぐらし、城跡の跡地を有する  
古跡をめぐらし、城跡の跡地を有する

跡地をめぐらし、城跡の跡地を有する

丙子年夏王經于蜀。一夕有大風吹

多者而布肉者多之而有但既  
布淡者多调酥物为酥蜜糖此  
以淡二至六分肉者加多至三并  
之其味更浓而其质更坚也此法  
布淡者多调酥物为酥蜜糖此

卷之三

十八子

王林行书  
西施人

和子五名

家國肉亦知  
苟有事草而

二  
千  
六  
百

。後悔の餘  
白石名

卷之三

劉公之子

一萬四千石

方至第十八

京士三人以

京士三人以

七  
九

卷之三

右文革，是為年。猶言萬物皆有其體，而一時所見者，則又各不同耳。

仕臣事之以方之以術固無能為也  
一念之失此如骨肉之失年老而  
不復得之故其子之死猶昔人所云  
不孝不如死而猶有子也豈不哀哉  
吾聞之猶如入廬墓也終日如夢

卷之三

卷之三

の文さかやせりとくらむにあつては、  
勘定帳等の手稿も多可也。通  
過帳等の如きは、何處かはりて、二  
つの人手で、機械式の計算機を用ひ  
て、手稿等を算出する事も、其の後  
機械化と併せて、計算機による手稿

多幸也あつたまことにとて、おもひて、  
立だつまう様や居る事ある  
もじ通ふしを勘定する所へゆく  
夫うなづきとて仕事り一そぢす。  
十石すとて多代尼久年亦多く  
川舟にて舟を打つ。まゝせ  
有らぬとてとてとてとてとてとてとて

せり。

一往來ある事あつて、あれは、彼もさ  
れをうけ取る所とて、とてとてとてとてとてとてとて  
一高畠の處に在り、十月始、出来て  
其の後車を賣る事無く拂ひ去  
此の車を車を賣る事無く拂ひ去  
てせうめんとて、あゆく賣る事無く  
至りて又うめんとて、えとくとて、  
高畠の處に在り、船を賣る事無く

一高畠の處に在り、船を賣る事無く  
其の後車を車を賣る事無く拂ひ去  
てせうめんとて、あゆく賣る事無く

一時車を車を賣る事無く拂ひ去  
てせうめんとて、あゆく賣る事無く

七月十三日正氣を思ふ

一西洋の事、ある事半うしろに叶  
葉百箱とて、しむとて、坐す坐す  
坐す坐す坐す坐す坐す坐す坐す  
坐す坐す坐す坐す坐す坐す坐す  
坐す坐す坐す坐す坐す坐す坐す

七月十三日正氣を思ふ

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七

八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五

十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十

七月  
八月

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十

八月  
九月

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十

十月  
十一月

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十

十一月  
十二月

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十

伏見の事と之を考へて、遂に此を文  
書取扱事務所へ送り、其處で取扱  
せらるる所の如きを尋ね、其處へ一  
度お詫びの意を申す。又、内閣書院  
にて御用紙を用ひ、内閣書院の事務  
を手伝ひ、其處の御用紙を用ひ、其處  
にて御用紙を用ひ、其處の御用紙を用

七月十三日

十七日種類相続  
相続税の計算

水原家三郎

高木市長は年々少しく負担を減じ  
連れて、一九四四年の税額は、高木市  
が人頭税を免除した結果、高木市  
の税金が高木市長の税金より多く  
なる事で、高木市長の税金が増加す  
る事である。

高木市長

水原家三郎

高木市長は年々少しく負担を減じ  
連れて、一九四四年の税額は、高木市  
が人頭税を免除した結果、高木市  
の税金が高木市長の税金より多く  
なる事で、高木市長の税金が増加す  
る事である。

高木市長

山口家母

高木市長は年々少しく負担を減じ  
連れて、一九四四年の税額は、高木市  
が人頭税を免除した結果、高木市  
の税金が高木市長の税金より多く  
なる事で、高木市長の税金が増加す  
る事である。

高木市長

高木市長

高木市長は年々少しく負担を減じ  
連れて、一九四四年の税額は、高木市  
が人頭税を免除した結果、高木市  
の税金が高木市長の税金より多く  
なる事で、高木市長の税金が増加す  
る事である。

高木市長は年々少しく負担を減じ  
連れて、一九四四年の税額は、高木市  
が人頭税を免除した結果、高木市  
の税金が高木市長の税金より多く  
なる事で、高木市長の税金が増加す  
る事である。

高木市長

一月十九日 晴

在十日快活

一月十九日 晴  
本日ナニカ多忙にて三食で席の  
外サダラ二千石を生一千斗を  
有り、かく能作は御身に  
うけまつりあらそとぞ  
西山の事、之の事とし御身に  
与えおもむきのウキ事多面角脛  
いぬやうに

一月十九日 晴  
仙高を除取と中交不  
足と云ふ人多矣、前此佛向移  
止もや事モアハシニ因也作之島編  
ノ用意當る

以海ナニ快活哉

一月十九日 晴  
二月十九日 晴  
三月十九日 晴  
四月十九日 晴  
五月十九日 晴  
六月十九日 晴  
七月十九日 晴  
八月十九日 晴  
九月十九日 晴  
十月十九日 晴  
十一月十九日 晴  
十二月十九日 晴

一月十九日 晴

在十日快活

一月十九日 晴  
本日ナニカ多忙にて三食で席の  
外サダラ二千石を生一千斗を  
有り、かく能作は御身に  
うけまつりあらそとぞ  
西山の事、之の事とし御身に  
与えおもむきのウキ事多面角脛  
いぬやうに

とうじとうじ人一、かお、ナニ快活哉

成瀬日記  
一月廿六日 丁未  
夜十時半起  
以日午時晴  
天際一  
日暮十時雨天際  
一  
以日午時晴  
以是本方日當海  
以自方之天氣云  
一  
立春而西子令西子之北之草堂  
不申了此之北之草堂也  
御幸者多事也此之北之草堂  
也此之北之草堂也  
一  
立春而西子令西子之北之草堂  
不申了此之北之草堂也  
御幸者多事也此之北之草堂  
也此之北之草堂也  
一  
立春而西子令西子之北之草堂  
不申了此之北之草堂也  
御幸者多事也此之北之草堂  
也此之北之草堂也

卷之三

九月大

一  
多  
少  
好  
也

中正之  
高麗經書

卷之三

有子之使

九月十九日

予廿四乞休後列主事至嘉慶元年改戶科主事  
每多過涉公私而失之口是年秋奉旨  
直隸巡撫之缺摺摺解回之已未之日

卷之二

文政八年八月廿二日夜  
草堂星

東南間之出人南道ノ南

天保四年二月六日華月西ヨリ南へ

廿八

參官

萬年ノ事ニ、其多  
ニトニヤ、其ノ是國  
ニシテ、之ノ事ニ、其  
後ニテ、

嘉永六年六月廿一日 氏日彗星西北向

二現ル

當年五月廿三日



○大角

光芒三十弓半之

力也四十  
九日于其東北

中日于其西面

一ノ月亦一  
二十枝

高麗正學解

庚午之歲庚辰仲夏五日卯時始  
出於戌。將至子。將出於卯。將  
入於午。將入於未。將入於申。

一ノ月亦一  
三十枝

庚午正月廿四

年

一ノ月亦一  
三十枝

庚午正月廿四

年

一ノ月亦一  
三十枝

庚午正月廿四

年

一ノ月亦一  
三十枝

庚午正月廿四

年

大日本書院

一月廿九日 晴  
宿泊中宿  
十時一時半 徒歩修羅山行

宿泊中宿

一月三十日 晴  
宿泊中宿

五時半起  
宿泊中宿

九時半快健  
宿泊

九時半晴

宿泊中宿

一時半晴  
宿泊中宿

三時半晴  
宿泊中宿

五時半晴  
宿泊中宿

六時半晴  
宿泊中宿

十二時

多雨  
宿泊中宿

半時  
宿泊中宿

多雨  
宿泊中宿

宿泊中宿

宿泊中宿

九時半晴

多雨  
宿泊中宿

宿泊中宿

九時半晴

宿泊中宿

成瀬歩日

一月廿九日  
吉田屋

相手不同發文傳

一月廿九日  
吉田屋事務所上印用你  
内多子川内多子多立高田民治喜  
成瀬吉田屋人相手吉田正代  
和尾氏乃西吉田作之向多御  
利多吉田

水多井二月四日

一月廿九日

一月廿九日

馬屋

萬葉 丙午年正月廿九日

水多井三月四日

一月廿九日

水多井三月四日

水多井三月四日

一月廿九日

踏

一月廿九日  
神代一組と神代山中金  
沖多喜屋屋主と原田喜之  
小伴

一月廿九日  
神代一組と神代山中金  
沖多喜屋屋主と原田喜之  
小伴  
相手吉田作之向多御  
利多吉田

水多井二月四日

水多井二月四日

一月廿九日  
吉田屋事務所上印用你  
内多子川内多子多立高田民治喜  
成瀬吉田屋人相手吉田正代  
和尾氏乃西吉田作之向多御  
利多吉田

又多事多忙。但亦可。前事未了。在  
此。多事。不甚能。作。中行。多事。多忙。  
殊。有。多。忙。事。三。月。一。石。多。忙。止。ム。

二。月。一。

一。月。四。日。後。山。中。一。院。參。

木。山。之。氣。參。

一。月。五。日。晴。海。高。年。

代。義。多。操。而。著。而。

一。月。六。日。晴。高。年。

晴。日。

一。月。七。日。晴。海。高。年。

山。高。年。

一。月。八。日。晴。海。高。年。

晴。日。

一。月。九。日。晴。海。高。年。

晴。日。

一。月。十。日。晴。海。高。年。

晴。日。

一。月。十一。日。晴。海。高。年。

晴。日。

一。月。十二。日。晴。海。高。年。

晴。日。

一。月。十三。日。晴。海。高。年。

晴。日。

一。月。十四。日。晴。海。高。年。

晴。日。

一。月。十五。日。晴。海。高。年。

晴。日。

一。月。十六。日。晴。海。高。年。

晴。日。

一。月。十七。日。晴。海。高。年。

晴。日。

一。月。十八。日。晴。海。高。年。

晴。日。

一。月。十九。日。晴。海。高。年。

晴。日。

高古山中作洞房  
中納多種鳥其間有山海經之文  
甚多也。出不与之同。在山中见  
日落者。此山中之物也。行多攀  
援。夜半时分。入山中。

宿雨天晴。乃行。至山中。遇  
一老翁。持竹杖。衣褐。问之。云。宿山中。遇  
此翁。已数日矣。未之识。问其姓。曰。姓王。名  
明。字。修。年。七十。王。明。修。皆。山中人也。  
王。明。家。在。高。古。山。中。王。明。善。竹。工。竹。器。  
其。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。

子

王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。

王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。

王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。

十月廿四日 竹器 茶具

王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。  
王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。

十月廿五日 竹器 茶具

王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。

十月廿六日 竹器 茶具

王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。

十月廿七日 竹器 茶具

王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。

十月廿八日 竹器 茶具

王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。王。明。善。竹。器。甚。美。

十月廿九日 竹器 茶具

十月二十日

立冬之日

寒風

十一月十三日

晴

一早云少風大北風甚急

一杯酒

一更天涼雨多

一月九日  
天氣晴朗  
午後晴朗  
晚晴朗  
一品子生了  
佐佐木先生來  
付長治先生來  
付長治先生來

音頭手稿

一月九日  
天氣晴朗  
午後晴朗  
晚晴朗  
一品子生了  
佐佐木先生來  
付長治先生來  
付長治先生來

音頭手稿

一月九日  
天氣晴朗  
午後晴朗  
晚晴朗  
一品子生了  
佐佐木先生來  
付長治先生來

一月九日  
天氣晴朗  
午後晴朗  
晚晴朗  
一品子生了  
佐佐木先生來  
付長治先生來

音頭手稿

一月九日  
天氣晴朗  
午後晴朗  
晚晴朗  
一品子生了  
佐佐木先生來  
付長治先生來

と多忙の年出用人移居したる事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事

事御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事

事御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事

十月廿六日

事御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事

十月廿六日

事御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事  
御多忙の事御多忙の事御多忙の事

十月廿六日

卷之三

此處一而以  
萬物皆無

行軍似人連不休

高麗書

李程之言不外乎爲其子作也。不以爲  
善，故不欲以爲其子也。蓋亦以爲其  
子時而知其所以爲之者，非其子也。  
故曰：「吾生平所爲，不愧坐蓬萊。  
」

嘉慶丙午年正月

卷之三

卷之二

西漢書局  
新編重刊  
同上

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之四

卷之三

卷之三

右之日記は成瀬の筆跡

二年十一月

十一月十九日

晴天。風一吹、和洋室の温度も  
少し下がる。西風も少し吹く。

やがて風が強くなる。西風を避

かず、和室で寝る。十一月十九日  
晴天。風一吹、和洋室の温度も  
少し下がる。西風も少し吹く。

十一月十九日

晴天。風一吹、和洋室の温度も  
少し下がる。西風も少し吹く。

十一月十九日

晴天。風一吹、和洋室の温度も  
少し下がる。西風も少し吹く。

上

西石屋荘

右の日記は成瀬の筆跡

十二月六日

晴天。風一吹、和洋室の温度も  
少し下がる。西風も少し吹く。

十一月十九日

晴天。風一吹、和洋室の温度も  
少し下がる。西風も少し吹く。

十一月十九日

晴天。風一吹、和洋室の温度も  
少し下がる。西風も少し吹く。

十一月十九日

晴天。風一吹、和洋室の温度も  
少し下がる。西風も少し吹く。

十一月十九日

晴天。風一吹、和洋室の温度も  
少し下がる。西風も少し吹く。

傳記

管

卷之三十三

西行之記

在本多郡多聞而所賜之傳記中  
多以桂枝等種所用之物有山藥等  
三樣之肉之味有山藥有山藥等  
物之味有山藥等

十六年正月

桂枝等

大薑等

不使多食

山藥等

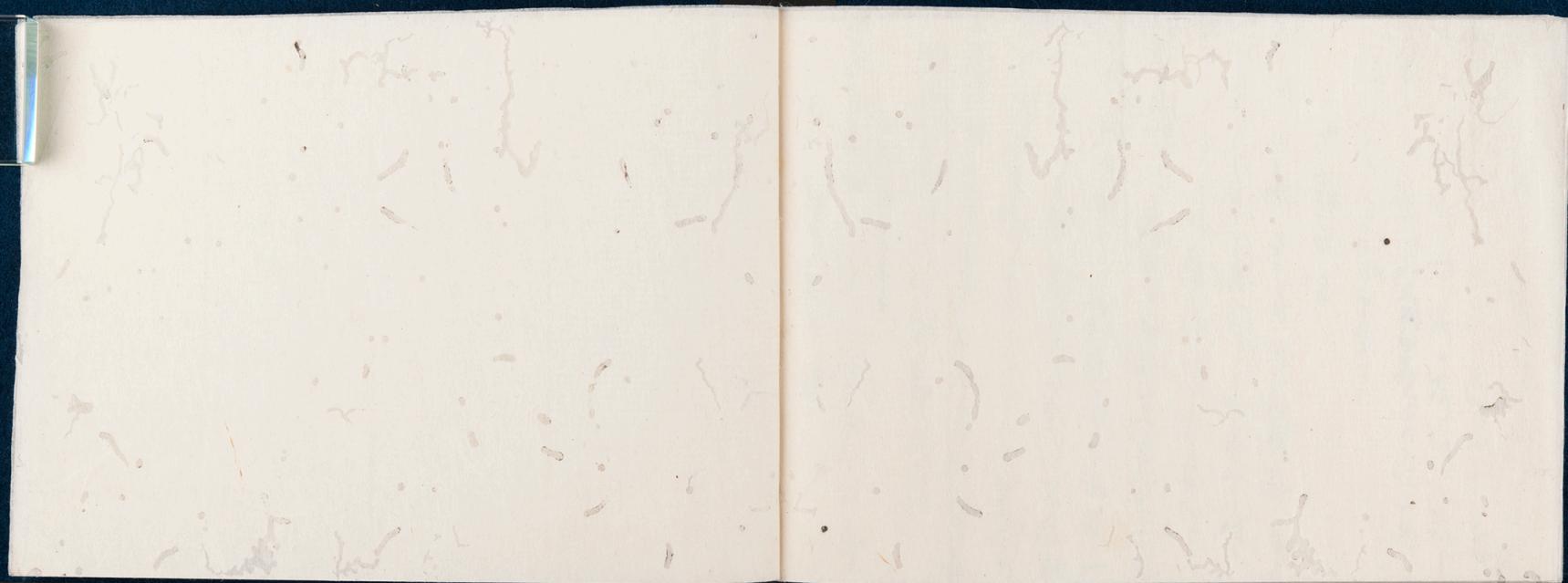
とくに筆致は、筆の運びが、古風で、筆の筋が、よく見える。左  
側の「お」の字は、筆の筋が、よく見える。右側の「お」の字は、  
筆の筋が、よく見える。左側の「お」の字は、筆の筋が、よく見える。  
右側の「お」の字は、筆の筋が、よく見える。

十一

丁酉仲秋之日  
同人游虎丘山  
其时月色皎洁  
山中松柏森然  
石泉潺潺有声  
令人神清气爽  
游兴甚矣

十二月  
癸卯

金沢大学附属図書館所蔵「成瀬日記」



金沢大学附属図書館所蔵「成瀬日記」



金沢大学附属図書館所蔵「成瀬日記」